

新しい英語教育に関しての提案 (2)

平見 勇雄

A suggestion on the new English education for English teachers (2)

Isao HIRAMI

Abstract

So far I have analyzed some of English language, especially the possessive genitives, from the viewpoint of cognitive semantics. And I'm sure some analysis will be useful to make students understand some English grammars in the English classes not only at high school but at university.

Teachers in high school and university are required to have the skills to develop students' grit to survive in the age without answers.

The aim of this paper is to propose one of the examples to cope with a new era of English education.

Key words : Language analysis, Universal grammar, English education

キーワード : 言語分析, 普遍言語, 英語教育

はじめに

5年ほど前に書いた拙書「英語の所有構文に関する考察」の3章で、言語を分析するアプローチに関して自分なりの見解を述べた。この考えが正しいと筆者は信じているが、これまで英語の所有構文を分析して浮かんだ考えだった。これが正しいかどうかはさておき、そのような提案をする意義を現在の教育との関連から述べたい。

今回の紀要論文は章によってテーマが異なっている

ので雑多な感もあるが、これからの社会に必要とされる「答えのない問題に自ら答えを出す」教育という点で関連した内容である。

1 言語習得と生物のメカニズム

最初に取り上げるのは言語習得に関して、別の視点からの言語の分析が必要なのではないかという提案である。今も基本的な考えに違いはないと思うが、かつては言語習得に関して大きく二つの考え方があった。

一つはノーム・チョムスキーの生得的（innate）な立場から普遍文法を求める考え方。人は人種に関係なく誰もがどの言語かに関係なくある言語を話す環境に置かれれば自然と話せるようになることから、多種多様に見える言語にも背後に共通した法則があり、それがあるからこそ人は言葉を話せるようになるというものである。

一方で、多種多様な言語に共通性を求めるものではなく、言語は個別的であるという、主に認知言語学と言われる言語学の考え方もある。相反する主張を前提として言語を分析する試みが何十年にわたって行われてきた。どちらに勝敗があがるのかと多くの研究がこれまでなされてきた。私は後者の立場から研究をし、経験を基盤として言葉を習得していくという考えである。

しかし両方の立場から言語の研究がされてきたにもかかわらず、一方だけに真実があるという結論には至っていないように思う。なぜなのか。それはもしかするとこの前提自体に何か問題があるからこそ結論が出ないのではないかというのがここ数年思ってきたことだった。その一つのきっかけとなったのが言語の習得に見られるある特徴が、生物のあり方にも（動植物の両方）に見られるように感じたからである。

その特徴とは、幼児はある言語環境にいと自然と言語を身に着けることができるようになる過程にある。チョムスキーに関する入門書でよく見かけた主張は、親が途中で文を切ったり発話をやめたりして、完全な文ばかり話しているわけではないのに、赤ちゃんはそういう言い淀み、間違った文、不完全な文を聞いても習得に支障が出るわけではなく、自然と正しい用例だけを選んで、最終的にちゃんと一つの言語を習得できるという事実だった。

確かにこの不思議な習得過程を説明するのは難しいが、実はよく似た現象が生物にもある。それが植物の栄養の取り方を含めた生存方法である。これは5年前に出した本の中にも引用した内容だが「植物は〈知性〉

をもっている」というステファノ・マンクーゾ、アレクサンドラ・ヴィオラが書いている本の180ページには「…根は水や酸素、養分を探して植物の生存を確保している。しかし単に水を感じてその方向に伸びたりいいというものではない。酸素、ミネラル、水、養分は土のさまざまなところにあり、それぞれが分散している。右へ伸びてリンに辿りつくべきか、左に伸びて、不足しがちな窒素を見つけるべきか、それとも上に伸びて、きれいな空気で呼吸するべきか。対立する要求をうまく調整し行動を決定する。さらに根が伸びていく際にはたびたびぶつかる障害物を迂回しなければならないこともある。

その上、大切なことは一本の根にとっての必要性だけでなく、植物の個体全体にとって何が必要かということも考慮に入れなければならない。重力、温度、磁場、光、圧力、化学物質、有毒物質、音の振動、酸素や二酸化炭素の有無などを絶えず計測し、その結果に応じて植物は根を伸ばしていく。単独で動いているのではなく、植物一個体の根系を構成する、他の無数の根とネットワークを築いている」とある。

つまりいろいろな栄養素を取り入れなければならない上に、そのバランスまでもを体の中で整合性が保てるように調整する機能が植物にはもともとあるという内容だ。これが可能になるには複雑なメカニズムが働いているはずだが生物には元来この能力がある。

この現象自体が先ほど述べた言語習得に見られる現象とよく似ている。言語を習得する時はある環境の中で正しい文だけをインプットし、言い間違いや不完全な文は取り入れないという複雑な取捨選択が行われているからである。

この例は拙書の中で述べたのだが、実は植物だけでなく、人が食物を取ったときに、たくさんの中から自らに必要な栄養素を選び取って、体内でバランスをとりながら成長していく消化する機能とも似ている。もちろん人の場合、極端な食生活を続けると、摂取する栄養に大きな偏りができて問題になることもあるが、

摂り過ぎると（たとえばビタミンの類などは）必要のない分は排出される機能も一方で備わっている。最低限の調整能力は保持し、栄養の均衡を保ちながら生命を維持する能力がある。つまりこれは人に限ったことではなく動物も同じで、植物が栄養を摂取することとも共通したメカニズムである。

人間が幼児の時に言語を習得する際に、必要な部分だけをうまく取り入れ、他は排除していく持って生まれた機能が、生物の栄養の摂取と同様、何らかの役割を果たしているのではないかと思われる。しかも植物には動物の脳に対応するものがない。脳は生物が誕生して植物から動物が誕生する際に生まれたものなので、脳の出現には生物が本来持っているメカニズムは当然反映されているだろう。あくまでも想像ではあるが、だから言葉というものが生み出される過程において生物本来のメカニズムが言語誕生の際に影響を及ぼしたのではないかと思うのである。

2 他の動物との関係

生物は環境にうまく対応する能力をもともと備えている。もちろん環境によっては対応の範囲や程度もあり、必ずしもすべてに対応できるわけではないが、もともとは持っていなかった特徴が長い間ある環境にさらされることで獲得されるという能力もある。

適切な例と言えるかどうかかわからないが、犬と人間の関係を見てみると、人間にこれだけ好意的になつく特徴は、長年の間に積み上げられてきた習慣が一つの関係性を生み出したと言えそうだ。共生と言われる関係が昆虫と植物をはじめとするさまざまな動植物の間に見られることも、おそらく類似した長年の関係が影響していると推測できる。

関係が長年続くと、人間の持っている言語の特徴も犬に影響を及ぼす可能性もあるかもしれない。もちろん犬が人間との関係の中で人間の言語の影響を受けることなく、もともと人間と同等の能力を備えていたと

も考えられるので、どちらが真実であるかは現在のところ少なくとも私にはわからない。しかし言語は元来人間同士のコミュニケーションのためのものである。それを人間がいろいろな動物を対象に飼いならしてきた過程で、犬はおそらく最も身近な存在であることもあって人間の言葉を理解するようになった。牛や豚、その他の動物よりもその理解度はおそらく高い。実際にコミュニケーションが取れる内容は訓練されたものを含めるとかなりの数にのぼる。

それが可能になった理由の一つは言語が人間特有のものではないからではないかと思う。あるいは仮にかつては人間特有のものであったとしても、生物の進化で見られるように、関係が強く長い期間にわたることによって、それが犬に順応するようになったからではないかと思う。

たとえば犬も人間の言語と同様に、言葉の組み合わせと配列の法則をもともと持っているとしたら、その能力が人間の言葉の理解にも転用され、少し高度なコミュニケーションにつながったと考えることも可能だ。

組み合わせの法則とは、その意味の通り単語を組み合わせることである。日本語や英語は名詞の前に修飾語を置くが、フランス語は名詞のあとに修飾語（形容詞）を置く。そういう規則があることによって言葉の意味が成り立っている。もう一つは配列の法則で、「人、食う、サメ」と「サメ、食う、人」では意味が違う。この特徴が犬にもあるかということだが、犬も吠え方や唸り声、遠吠え、鼻声などの組み合わせにおいて、組み合わせのある場合とない場合があり、さらにしっぽの動きと声の組み合わせにおいても規則的なところがあるという（「犬語の話し方」321ページ）。詳しくは第19章（318～328）を参照していただきたいが、筆者のスタンレー・コレンは文法や構文法の初歩的なものは人間の言葉と同じように存在すると述べている。

犬がこのような人間特有とされる特徴をもともと持っていたのかどうか、あるいは長い間の関係が続く

ことによって犬の言葉自体に組み合わせが生まれていったのかはともかく、それまで犬が経験したことの無い(本来は犬の間のコミュニケーションだけだった)人間の言葉を理解するようになったのは、程度の差こそあれ、生物の進化と密接に関係しているように思う。そうであるならば、これも間違いなく生物にもともと備わった特徴が犬と人間の間のコミュニケーションの成立にも大きく影響を及ぼしていると言ってよい。

3 普遍言語の疑問

これまで理論言語学で注目されてきた中心の一つは間違いなく普遍言語の存在である。ただ普遍言語の存在は認知言語学の立場からすると問題点となるトピックである。確かに我々は人種を問わず、ある言語環境に置かれると誰もがその言語をしゃべれるようになる。そのためすべての言語には背後に共通するものがあると考へたい気持ちは認知言語学の立場で研究している者にもよく理解できる。

ただどの言語にも共通するそのような抽象性の高い言語を設定する必要性が本当にあるかは検討しないといけない。たとえば言語に関連しているのは文法だけではなく、さまざまな面にわたっている。言語を成立させている第一の(というか最初の)要因は音声である。しゃべるという行為にかかわっているのは音であるから、音声が重要な考察の対象であることに変わりはない。では音声に関してそういう提言はあるのか。この分野は詳しくないが、私自身はよく似た音声の背後に共通の音を求める研究を聞いたことがない。

世界の言語の文法が違っているように、発音も同じではない。よく似た発音はあっても、細かく見るとずいぶん違う。むしろ全く同じと言える発音は少数と言ってよい。日本語の「あ」は中国語をはじめその他の言語では似た音は一つではない。中国語、英語、フランス語、ロシア語など、主要な言語の発音を習得する時に、外国人がずいぶん苦労しているのを見てきた

が、それは母語にはない特徴を持つ音だからである。しかし完全に同じではないのに何とかコミュニケーションが成り立っているのは、外国人のしゃべる語を聞き取る際に、自分たちが使っている似ている音として聞くからである。つまり日本人が、日本語を話す外国人の音声を理解できるのは、自分たちが使っている日本語の音しか知らないわけだから、多少の違いはあっても似た音以外の解釈はできないのでその音と受け取らざるを得ない。自分の知っている、もっとも近い音と解釈するからである。逆に l と r の区別のない日本語を話す日本人が road と発音すべきところを lord と発音しても通じるのは前後の文章からして「道路」と「神」の意味のどちらで使っているかが英語を母語とする人には理解できるからである。発音に限らず、人間は多くの場合、これまで経験したこと、知っていることを土台に、それに沿う形で新しいことを判断したり行動したりする。したがって母語である言葉を土台として新しいことに対応する。我々が理解しづらい文章の意味を探る際も、前後の情報を参考にして、意味が成り立つように解釈するのも同じである。

ところで我々日本人には「あ」は一つだが、これに似た音をいくつか持つ他の言語にも共通項を見出す試みはされているのだろうか。あるいはする必要はあるだろうか。中には日本語の「あ」と「を」の間に位置する音があるが、それはどちらに属するのだろうか。すべての言語の文法に共通点を見出そうとするのが普遍言語というものなのだろうが、すべての言語の発音に同様のアプローチを取ることは提唱されていないのであれば、なぜ文法には必要で、音となるとその必要性を感じないのか。

音声に共通項を求めることに違和感を感じてしまう人は私以外にもいるだろうと思う。なぜ音声となると共通の特徴を見出そうとしないのか。しかも文法同様に、中には言語特有の発音というのがある。たとえばフランス語は学生時代に習った言語なので、いくつかのそういう発音があったことを覚えている(そして結

局習得できないままになった)。

文法に関して言うと、日本語には英語の関係代名詞にあたるものがない。中学の英語の先生の中には私が学生時代に関係代名詞を「～するところの」と訳していた先生が何人もいた。日本語訳は、理解はできるものの、その日本語自体不自然で、日常会話では聞いたことのないものになってしまっていた。ただ単語として存在している限り、何も訳さないのもおかしい、それに対する訳語を示さないと不安に思う生徒もいたからだろう、本来の言語には存在しないものを「創作」することになる。

しかし元来ないものに対して、背後に本来はありと仮定し、それがあある言語においては表面的に出現する、しかししない言語もあるという設定が意義あることなのか。発音に共通項を見つけることが不自然であるのと同様、やはり普通文法の設定にも何か疑問を感じてしまう。

この問題は中学の基本的な英語にいくつも見つけることができる。言語の文法もすべてに共通するものがあるとはとても言えそうにない。たとえば英語には文型という文の形式があり、英語はこの5つの形を駆使して表現しようとするが、日本語には5文型などない。しかも日本語は主語のないのが普通の文も結構ある。

日本語と英語というたった二つの言語でそうだ。これを全世界7,000という言語に共通する何かを見つけようとしても現実的ではない。特定の言語だけに見られる固有の概念なり発音、文法規則なりが出てくるとは少し外国語を勉強すると出合うし、系統の違う言語であればあるほど、そして比較する言語の数が多くなればなるほど共通項は出てきそうにない。仮にその背後にある、非常に抽象性の高い共通項が仮にあったとしても（これを専門用語でスキーマと呼んでいる）、それが本当に文法の本質ひいては言語の本質と言えるのか。そう考えると余計に抽象性の高いスキーマを設定することに懐疑的になってしまう。

発音に関しては立花隆氏が編集した「脳とビッグバ

ン」という本（朝日文庫）の、日本語の発音と英語の発音で脳が反応する部位が違っているという実験結果が報告されている（特に「使う脳は第一言語で決まる」という201～202）。必ずしも脳の一つの特定の箇所だけが発音に関係しているわけではないことがわかっている。新潟大学の中田力教授が行った実験を紹介している内容によると、日本語と英語で使われている脳の領域が違っている。したがって文法に関しても同様の結果が出る可能性は高い。

発音に関して少し付け加えると、確かに赤ちゃんが発ししやすい音というのは存在する。昨年の夏に日本実践英語学会で大妻女子大学の服部孝彦先生の発表の中で（2023年9月15日）、どの言語でもpaやba、そしてmaが最初に習得されるのは、赤ちゃんが発声しやすい、人間が持って生まれた唇の機能と関係しているという。肉体的な機能は人種に関係なくほぼ同じなので、当然のように同じ発音になる。Mamaという単語がごく初期にどの言語にも生まれるのはそういう理由がある。そしてそこから固有の言語体系に身を置くことによって、徐々に音の価値が決まっていく。（たとえばlとrの発音の違いは英語では重要な違いになるが、日本語ではそうではないというようなことである）。

ただし深層構造、表層構造ということを用いる生成文法の考え方を取ると、たとえば服部氏の説明では次のようになる。赤ちゃんは最初は誰もがlとrを聴き分けており、当初は誰もが聴き分けられる能力はあっても、ある言語で有意味でなくなってしまうとその差は背後に後退するとのことだったが、これは根底の部分で共通性がある前提で出てくる考え方である。最初から言語は個別的という考えでいけばこのような考えをする必要はない。

概念（この場合意味とほぼ同じ）の習得などを考えても同じである。多くの概念はその文化の中で経験していくことで決まる。日本では蛾と蝶は区別されるが、フランス語では両方を区別せずパピヨンというのと同じ。独自の発音になるのか概念になるのかは個別的で

ある。そしてこれは学習による習得（経験することで獲得される習得）である。

さらに概念が生まれるのも当然のごとく経験によって生まれてくる。これは同じ大学で東洋医学を研究されている孫基然先生が述べた説であるが、心（英語で heart）が心臓に宿るという考えが多くの世界で共通するのは（少なくとも日本や英語圏では）、嬉しい時、悲しい時、恐ろしい時や驚いた時など、さまざまな感情で心臓がドキドキするという共通の土台が経験としてあるからではないかと言う。全く違う種類の感情であっても、心臓の鼓動という点においては共通している。相手に何か重大な告白をしてその反応が気になる場合（プロポーズでも癌の告知でも、誰かが死んだという連絡、あるいは犯罪の自白でも）心臓の鼓動が早くなるという反応においては一つの同じ反応である。これは間違いなく経験によるものからあとになって心臓と心が結びついたのであって、心という概念が心臓と結びつく原因は間違いなく「あとづけ」であって生得的ではない。

こういう例を丹念に追って行けば、鶏が先か卵が先かという、答えの出ない迷路に向かうのではなく、もっと別の観点から言語を考える方がよいように思う。人間である以上、生まれ持った身体的な特徴をはじめとした、それこそ生得的な部分も間違いなく影響するだろうし、経験的なことも間違いなく影響している。どちらが正解で、どちらが間違っているという結論には至らない。なぜならこの二つは人間の言語習得を考える上でいずれも不可欠な要素で、対立するようなものではないからだ。

語弊を恐れずに言えば、生成文法、認知言語学の土台となっている、二つの理論言語学の、重要な別れ道となった前提で言語習得を考えていたのでは結論は出ないように思われる。しかし今でもこの考えに沿って言語を探るべきだと考えている研究者は多い。

変形文法が提案されてもう70年になる。それを歴史がまだ浅いと考える人もいるだろうが、何十年という

研究が活発に行われたにもかかわらず、いまだにどちらが正しいかに明確な答えが出ないのは、従来の枠組みで言語を考えてしまったから決着がつかないのではないかと思う。どちらの考え方をも否定できない事実は多くあるし、確かにチョムスキーが述べた、なぜどんな人もあれだけ異なる言語をしゃべれるようになるのかという主張は魅力的である。だからこそ背後に共通性があると考えるのはもっともなことに思う。ただ共通性を見つけるだけが唯一の方法であるのか、別の方法で共通項を探る手段はないのか、その可能性を見つけようとするのも大切なことだと思う。

4 学生に何を見せていくか

中学、高校、大学と、英語の授業が必須となっている教育の中で、以前より感じていたことのの一つが、教えている生徒に対して先生方はどの程度のレベルの知識を持つべきだろうかということだった。受験に特化した授業はともかく、ここには専門学校や塾の先生方も含まれる。たとえば中学の先生が、教科書に掲載されている内容を確実に習得している必要性は当然のこととしても、本当にそれだけでよいのかということである。もしそれでよいのだとすると、極端な話、先生と、その授業を受け、内容を確実に習得した学生の実力は結果的に変わらないということになる。しかしそれでは優れた教師としての資格があるとは言えない。

中学の内容といえども、中には難しい問題もあるので、そういうトピックをいかに教えていくかを研究することも大切だ。実際にそういったことに取り組んでいる先生は多くいる。たとえば定冠詞等は日本人にとって難しい問題の一つなので先生方でさえ全員が理解しているかというところなかなかそうはいかないだろうと思う。それを研究会で話し合っただけで授業の時に直面した内容を持ち寄り解決策をさぐるというのもいい。

またどのような授業にすれば学生の理解度をあげら

れるかと、英語教育の方法論に関してそれぞれの教育方法を公開しながら、他の先生方の授業を参考に教師としての腕をあげていくことも大切だと思う。

ただ、必ずしも指導方法や知識の面だけを磨けばいいとも思えない。たとえば中学の先生が、一段階上の高校レベルの内容を知っているというのが、学生との違いでいいのだろうかということにも私はやはり疑問符がついてしまう。というのは中学、高校の先生は、教える対象の学生や教える内容は違ってどちらも大学を卒業している以上、知識に関しては変わらないはずだからである。さらに大学教員となると高校のレベルはもとより、それ以上の内容を教えられるレベルが要求される。だから大学院で自分たちが研究したテーマで、何かしら学生に英語に対する興味を持たせられる内容があるならそれは活用すべきだ。

なぜこのような提案をしているかという点、これからの時代に必要とされる能力は、答えのないものに対して自分たちで考え、解決していく能力だと言われる。現在行われている教育もそれに舵を切って新しい教育の試みがなされている（ようだ）し、なされようとしている。

しかしそうであれば、学生ばかりが対象でいいはずがない。教育者自らがその姿勢を見せる必要がある。自分たちが学生に行っている授業にそのような「答えのない、自分たちで答えを見つけていく問題」を探索している姿勢を見せ、その必要性や面白さを伝えることは大事なことだと思う。

学生が変わっていく大きな要素は教えていく中身だけではない。教える側にそれが大切だという姿勢を見せることなく、突然方針を転換しただけでは変わっていかないだろう。

英語の知識を増やしていく勉強会や教育方法の模索は今に始まったわけではない。かつてより行われていたことで、私がこれまで参加した中学や高校の教員の勉強会は特に教育方法の自身の紹介がほとんどであった。確かに英語嫌いや英語を不得意とする学生に何と

か理解させ、苦手意識を克服するための取り組みが先だという現実問題に追われている現場も多い。したがってそういう現場に立たされている教員に対しては私の提案は無理があると言われそう。

しかし文部科学省が教育の指針を出し、それに従って教育を進めていく方向になった以上、それをできる範囲で反映していかなければならない。現場と理想の間に大きな乖離があらうと、時代に合わせた教育が必要とされていることはわかる。だからわずかであってもそれを実際の授業に反映させていくことは避けられない。それなら従来から行われている教育方法に縛られた内容だけに留まってはいけない。「答えのない、自分たちで答えを見つけていく」ことが反映される授業にするよう何らかの提案が必要となる。

私が学会や研究会に出た範囲での印象であるが、学生に答えのない、自分たちで答えを見つけていくことに焦点が当たった発表は非常に少なかったと思う。テーマは何でもよい。以下にあげるのは単なる一つの例で、この内容である必要は全くない。ただできることならこれまでに習った範囲の内容を取り上げれば、より学生に興味を持たせられるはずだ。よく私が紹介する例は次のような例である。

Many students read few books.

（多くの学生はほとんど本を読まない。）

Few books are read by many students.

（多くの学生によって読まれる本はほとんどない。）

この例を出すのは私自身が当時知って感銘を受けたからである。能動態と受動態は意味がほぼ同じと習った中学、高校の頃、こういう意味の変わる例は教えてもらえなかった。教えてもらえなかったというより、おそらく高校の先生も知らなかったのだと思う。これらの文は決して特殊なわけではない。むしろ知らない人はいないくらいごく普通の文である。これはなぜ意味が変わるのかに関して、既に専門としている研究者の間では一つの答えが出ているので「答えのない、自分で答えを見つけていく……」という部類には入らな

いかかもしれないが、これを説明できる英語の先生方はほとんどいないといっているだろう。

しかし好奇心の強い英語の先生なら是非とも答えを知りたいと思う部類の問題ではないだろうか。この手の問題は中学、高校の授業の内容で他にもある。たとえば英語の授業で、英語は5文型というのを習うが、単に英語には5つの形があるのだとSVとかSVCの形式を教えるだけでは学生に英語に対して何らかの好奇心を植え付けたり、持たせることに成功する確率は少ないように思う。もちろん中には鋭い視点を持った学生もいて、国語の授業では習わなかったのに、なぜ英語には5文型という決まりがあるのだらうと、自ら興味を抱く者もいるだろう。しかし受験という大きな目的がある学生にとって、疑問は持つことがあってもおそらくそれ以上に進むことはないだろう。

しかし英語を専門とする教師が一步踏み込んで、日本語と英語の特徴に関する興味を持ち、授業の中でごく簡単に特徴を解説したらどうだろうか。たとえば日本語には主語のない方が普通の文がたくさんあるが（そもそもそういったことを考えたことがない学生も多くいると思うが）代表的な文をいくつか出し（池上嘉彦氏がよく例に出した川端康成の「雪国」の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」や新幹線の中でのアナウンスの「まもなく京都に到着いたします」という文なら学生も取っつきやすいだろう）、これを主語が必要な英語に訳するときどうするのか（実際新幹線に乗ると英語でアナウンスと車両の前方に字幕で案内が出るのでその文を教える）を少し出すだけでも学生には大きな刺激を与えることになるだろう。さらに「雪国」の場合、冒頭の部分における日本語と英訳では、日本人と英語を聞いた外国人の間で大きな差が出るのが知られているが（これも池上嘉彦氏がたびたび出した例である）、そういう例を紹介するだけで、これまでの英語の授業ではできなかった気付きを学生に与えられるはずである。日本語の「雪国」の文章は主語がないがゆえに文を読むと筆者と読

者が一体となって列車に乗っているイメージを想像させる。しかし一方の英語訳では主語を明記しないといけない。そうすると主語を必要とする英語は主語を示してしまうことで、主語がないゆえに日本語が生み出すイメージとはまるで違う光景を想像させることになる。これはかつてNHK教育（1991年2月25日、26日、27日放送のシリーズ日本語という番組）で池上氏がこのテーマを取り上げた際に実験したことがあり、その際出演した外国人らは山から列車が出てくる、もっと客観的に光景を見ているイメージが浮かぶと言う。この事実を知れば、この背後には何が隠れているのかに興味を湧くはずである。

こういうことに先生自らが興味を示し、問題に取り組んでいる姿を見せることは言語の奥深さを知らしめる優れた手段だと思う。と同時に、英語に興味を持たせる大切な試みであると思う。

もう少しつけ加えておくが、ただこういう教育をやったからといって多くの学生が必ずしも興味を示すと私は思っていない。おそらくはせいぜい学生のほんの数パーセントしか反応しないだろう。しかしそのごく少数の反応する生徒に興味をいだかせることが私はとても大切なことだと思う。

すぐに役立つことに価値を重んじ、目に見える形での結果ばかりが求められ、それが評価され、安定性を求める学生が多くなる時代にあって、それとは正反対の、保証されるかどうかかわからないが、興味あることにチャレンジしていく姿勢は研究者に大切な資質である。そういう資質を持つ学生を先生方が掘り起こしていくことは、これからの教育者に最も必要とされる、そして今最も欠けている視点ではないかと思う。

上で取り上げた内容は池上氏によって説明され、一応の決着がついているが、これとは別の考えからの答えが見つかるかも知れない。もしかしたらその説明は池上氏の説明と同等か、それ以上の内容になるかもしれない。これまでの医学や科学技術の発展も同様であった。写真もフィルムという手段以外の、デジタル

でのやり方が可能になった。全く別の解決方法を見つけようとする姿勢こそがこれからの「自ら答えを見つけていくための教育」に必要である。それを反映させられる問題は英語には多くある。だからこそ実践的な能力を重視する傾向にある今の英語教育にも、上で述べたような新しい教育が必要とされていると思う。

最後に

今回述べた内容は、ここ数年思ってきた、紀要に書いてきたことをもう一度再確認する内容となった。この年度末で退職するにあたって、研究者としてこれまで私が最も興味ある記憶に残ったトピックを改めて紹介し、今後の英語教育に必要とされる課題とを重ね合わせて一つの提案をさせていただいた。

参考文献

- 平見勇雄（2016）言語と生物の類似点についての一考察 国際教育研究所紀要 第22・第23号合併号. pp.109-118.
 ———（2017）言語、文化、生物に関する共通性の一考察 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系 27. pp.65-72.
 ———（2018）言語と生物の類似点 補足 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系 28. pp.69-76.
 ———（2019）言語と植物における類似点の一考察 吉備国際大学研究紀要 人文・社会科学系 29. pp.47-53.
 ———（2019b）『英語の所有構文に関する考察』ふくろう出版.
 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館.
 毛利可信（1983）『橋渡し英文法』大修館.
 立花隆（2004）『脳とビッグバン』朝日文庫.
 スタンレー・コレン（2002）『犬語の話し方』文春文庫.
 ステファノ・マンクーゾ、アレッサンドラ・ヴィオラ（2015）『植物は〈知性〉を持っている』NHK出版.